

室町時代後期の日本の政治体制や国内の概略を知っていたと考えられます。

■明国人船長アヴァンの勇気

長官がザビエル一行のために準備した船は、明国人アヴァン⁽³⁾の持ち船で三百噸前後の大きさと推測される「海賊号」に日本渡航を請け負わせたものでした。この雇船契約については長官の強要であったのか、船長からの積極的な申し出であったものなのかは不明ですが、船長のアヴァンはマラッカに妻や家族を持ち、船はここを母港としていました。ザビエルは「船長はもしも日本から私が書いた手紙を持って来なければ、自分の妻と持っている全ての財産を没収されることを認めると書いた保証書を作成しました」とゴア宛ての書簡に記しており、アヴァンにとっては自分の帰還さえ危ぶまれる航海でありながらも、長官側に担保を差し出し忠誠を誓っていたことが述べられています。アヴァンについての詳細はわかりませんが、彼の家族や船の乗組員はザビエルの記述から考えると熱心な道教の信者であったようです。

■ザビエルたちの航海、そして日本へ

こうして、1549年の6月24日にザビエル一行はアヴァンの船でマラッカを離れました。当然のことながら、この頃はまだマラッカから日本までの航路は確定しておらず、船長や乗組員の経験と勘だけが頼りの航海だったと思われる。ザビエルが鹿児島上陸後に記した書簡からは、出航して間もなくザビエルの心の中にアヴァン船長や乗組員に対して強い不信感が芽生えてきたことが窺えます。ザビエルがアヴァンらを書簡の中で常に「異教徒」と表現し、長官との約束を違えて船が途中の島々に立ち寄り始めたことや、乗組員たちが香を焚き偶像を熱心に崇拝して生け贄を捧げている姿、さらに日本へ無事到着するかどうかを御神籤で占うところは、ザビエルのキリスト教宣教師としての許容範囲を超えていたようです。しかし、ザビエルは「それをやめさせることができませんでした」と記述しています。また、アヴァンらが御神籤を引いて占った結果、日本へ直行せずに明国で

越冬しようとする雰囲気が漂った時のことについては、異教と船乗りたちを「悪魔とその族^{やから}」とも後述しています。

このようにして、ザビエルは異教徒の信仰と隣り合わせでキリストを祈りますが、やがてそれまでの不信感や心の葛藤を上回る大きな出来事が起こります。それは船が嵐に遭遇して、ザビエルの従者マヌエルが船底へ転落したことでした。一命は取り留めたものの、回復には幾日も要することになります。ところが、これにも増して不幸な出来事が起こりました。同乗していた船長の娘が船から荒れる海へ転落して溺死したのです。異教徒たちは泣き叫び、父親のアヴァンはもとより乗組員やザビエルらキリスト教徒の間にも強い悲愴感が漂います。ザビエルは娘の死に「私たちは異教徒たちの魂がこれほど悲嘆にくれているのを見て、深く同情しました」と述べています。この後、異教徒たちは多くの鳥を殺して生け贄とし御神籤をひくと、船長の娘がマヌエルの身代わりとなって死んだとのお告げが出たのです。これ以来、ザビエル一行は異教徒たちからの身の危険を感じはじめています。

しかし、その心配は的中せずにその後は何事もなく平穏な航海が続きました。ところが、広東の港を目前にしてアヴァンや乗組員がこの港で越冬する気持ちを示します。ザビエルたちはこれに強く反対して説得に努めています。結局、アヴァンは港内に多くの海賊がいることを知って越冬を断念し、船を日本に向けて航行を続けました。そして、1549（天文十八）年の8月15日に鹿児島へ到着したのです。

■ザビエルの道教観とアヴァンの思想

スペインのバスク地方で生まれたザビエルはリスボンを出航して以来、インドからマラッカやモルッカ諸島間の海上移動には殆どポルトガル船を使っていました。また、船の中では宣教師という立場に乗組員たちは敬意を持って接していたはずで、異教徒が主導権を持って操る小さな船の中では居心地が悪く、我慢の連続であったことが想像できます。

こうしたことからか、船中のザビエルは異